

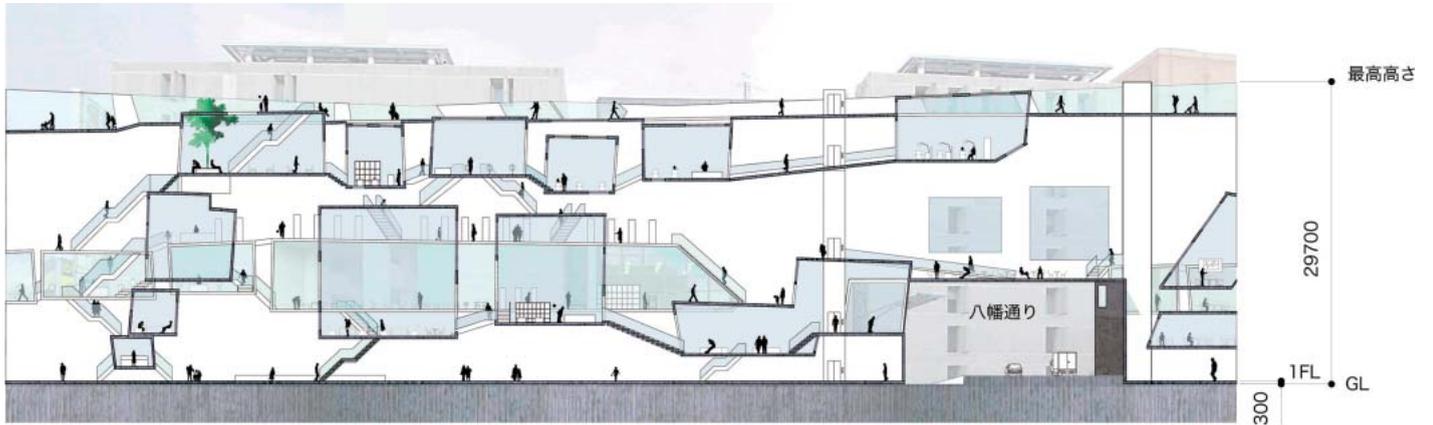


街を織り込み、都市を繋ぐ

線路跡地における複合施設の提案

上島 直樹 (うえしま なおき)

千葉工業大学 工学部 デザイン科学科



分断された街と街、関係性、そして過去と未来を繋ぐ建築の提案。

日本の都市の更新スピードは速い。再開発が行われる際、土地のコンテキストは無視され、愛着を持つ間もなく街は変化を遂げる。

敷地は渋谷、代官山区間線跡地。ここでは線路によって街が分断されている。周囲の建築物は床面積を最大限稼ぐため、ただ階層を重ねた建築で溢れ、建築間、階層間の関係性が希薄である。

線路があったからこそ存在する細長い敷地を一体的に計画する事で、街の質を引き継ぎ、過去と未来を繋ぐ。街に平面的に広がる行動や動線、周囲の形態をそのまま立ち上げる事で、街の質が建築として縦方向に広がる。2つの街の質が混じり合い、新たな動線や行動、空間同士の関係性が生まれ、街と街を繋いでゆく。

講評 東急東横線渋谷一代官山区間線が、東京メトロ副都心線の開通に伴い2012年に廃線となる。その跡地に延々と1.4kmも繋がる建築を建てようというのだ。そこが線路跡地だったという記憶を、建築を通して未来へ伝えていきたいとの考えと、線路によって分断されていた両側の街の広がりやを一体にしたいとの思いからだ。手法は、線路の両側に広がる街並みのコンテキストを、線路側にそれぞれ90度起こして織り込み、新たな空間を創出するというものである。何とも面白い発想ではないか。両側に水平に広がる道路が、90度折り曲げられたことにより垂直方向への移動を示唆し、人々を立体的空間へと誘う。その長く伸びる内外空間の変化が非常に魅力的である。そこで、実現時には、周囲の人々にとって視覚的障壁とならず、圧迫感が少なくなるような立面への工夫を期待したい。

(審査員：安達 文宏)